

栄養失調を原因とする移動が強調された。また一部の途上国では都市の貧困率が上昇しているという文言が含まれた。結局、「都市化敵視政策を棄てよ」という勧告は含まれず、「人口分布政策の目標が国際的に合意された開発目標に合致しなければならない」という曖昧な表現にとどまった。国連人口基金の理想主義的な立場は巨額の財源を必要とするもので、途上国はもちろん先進国にも直には受け入れ難いものだったと思われる。また米国は共和党政権の立場（中絶反対・市場主義等）から、批判的なコメントを行った。

次回第42回会合（2009年）の議題「ミレニアム開発目標を含む国際的に合意された開発目標に対する国際人口開発会議行動計画の貢献（The contribution of the Programme of Action of the International Conference on Population and Development to the internationally agreed development goals, including the Millennium Development Goals）」については、メキシコのズニング（Elena Zuniga）女史を議長とする事務局が選出され、準備に当たることになった。また第43回会合（2010年）のテーマは、「健康、疾病、死亡と開発（Health, Morbidity, Mortality and Development）」とすることが承認された。（鈴木 透記）

## アメリカ地理学会2008年大会

アメリカ地理学会（AAG：Association of American Geographers）の2008年大会は、4月15～19日の5日間、マサチューセッツ州ボストンのBoston Marriott Copley Placeほか三つのホテルを会場として開催された。本大会には毎年地理学者を中心に各国から多くの研究者が参加し、地理学会では世界的にも最大級の大会である。今年は、各種ペーパー・パネル・ポスター・ミーティングを合わせたセッションの合計が約1300にのぼり、ペーパーセッションでの報告は約4600を数えたほか、種々の特別講演・シンポジウム・巡検も実施された。当然ながら報告内容も非常に多岐にわたったが、各セッションにはそれぞれ多数の関係者が集い、会場は常時熱気に満ちていた。

筆者は、人口地理学・人口移動・GIS（地理情報システム）関連のセッションを中心に参加したが、いずれの報告も興味深く、これらのテーマにおける海外での近年の研究動向を探るうえで大いに参考になった。特にGISに関しては、わが国の地理学会と比較して全報告に占める割合が格段に高く、GIS以外のセッションでの報告においてもGISを利用した分析結果の提示が多くみられたことも収穫であった。全体を通じて、個別の分野にとらわれない柔軟な研究テーマ設定、空間的な観点を常に強く認識した研究の多さが印象に残った。限られた日数内で膨大な数のセッションが消化されるため、参加可能なセッションが絞られてしまうのは少々残念であったが、そのなかでも内容の濃い研究に多数触れることができ、大変良い機会であった。（小池司朗記）

## アメリカ人口学会2008年大会

2008年4月17日～19日の3日間、アメリカ人口学会（Population Association of America）の年次大会が米国ニューオーリンズにおいて開催された。本大会では、175のセッション（1セッション4報告）と7つのポスターセッション（1セッション70報告）が企画され、米国のみならず世界各国から参加した研究者による、およそ1,200本の論文が報告された。

当研究所からは、金子隆一、石井太、岩澤美帆の3名が参加した。金子は「日本の将来推計人口からみたライフコースの将来像 Life Course Prospects from the Official Population Projections for

Japan: The Longest Life with the Lowest Fertility」を報告した。石井は“年齢・コーホート分析の方法論的発展と知見”セッションにおいて「エイジ・シフトを考慮した日本の死亡推計モデル Mortality Projection Model for Japan with Age-Shifting Structure」を報告し、討論を行った。岩澤は当研究所三田房美との共同研究による「日本における晩産化と挙児希望女性の高齢化 Delayed Childbearing and the Changing Age Composition of Women who Desire Children in Japan」を報告した。

会長講演ではノースウェスタン大学の Greg J. Duncan が “When to Promote, and When to Avoid, A Population Perspective” という演題で講演を行った。またミシガン大学の Yu Xie がキャリア20年以内の中堅研究者に与えられる Clifford C. Clogg 賞を受賞し、マックスプランク研究所所長の James W. Vaupel が数理人口学への貢献に与えられる Mindel C. Sheps 賞を受賞した。

例年通り、出生、死亡、移動、人口推計、家族形成、労働などのセッションが中心であったが、今年は米国における高齢化や加齢による障害に焦点をあてたセッションなどが複数あり、米国内における高齢化問題への関心の高さが伺えた。また、開催地がハリケーン・カトリーナの被災地であったことから、災害に関するセッションなどが特設された。今回も大会に付設された多数のワークショップが開催され、その一つであるウィスコンシン縦断調査に関するワークショップに参加したが、50年続く同調査の歴史や特徴、今後の計画などが丁寧に紹介され、多くの有益な情報を得ることができた。

(岩澤美帆記)